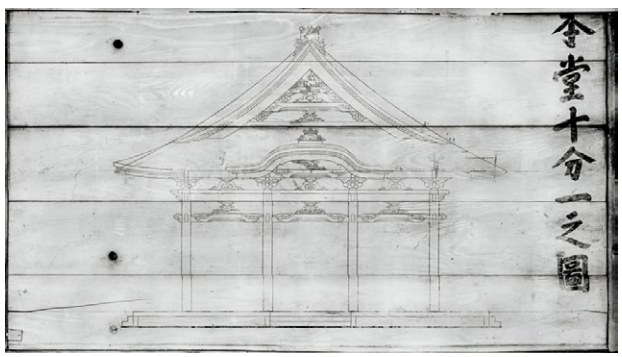
岡寺本堂建地割図の調査

奈良県高市郡明日香村岡に所在する岡寺（龍蓋寺）は、７世紀前半に創立したと伝える古刹です。文化２年（1805）上棟の本堂は、桁行５間、梁間３間、入母屋造、妻入の建物で、本尊は如意輪観音坐像（重要文化財）です。本尊の東西には脇侍像を安置する脇内陣と呼ばれる中二階の小部屋があります。2017年、この脇侍像を修理のため運び出したところ、東西両脇内陣の背面壁板にそれぞれ違う建物の建地割図（立面図と断面図をあわせて描いた図面）が描かれていることがわかり、奈文研が建築的調査をおこないました。

脇内陣は奥行が狭く、また一部の墨書が不鮮明であったため、まず中判デジタルカメラを用いて赤外線分割撮影をおこない、鮮明化した画像を用いて三次元解析をした後、解析成果からオルソ（正射投影）画像を出力しました。

作成した画像を調査した結果、東脇内陣建地割図は、現在の本堂とほぼ同じ建物が描かれており、本堂再建時に描かれた設計図であることがわかりました。西脇内陣建地割図は、該当する建物は岡寺境内にはありませんが、現本堂再建に関わった大工である、細田嘉七郎・豊田彦五郎・的場惣八の名が記されていました。また、岡寺の本寺である長谷寺本堂（慶安３年＝1650建立）と建築形式が似ていることから、長谷寺本堂などを参考に描かれた岡寺本堂の設計図のひとつと考えられます。

２枚の板図は脇内陣という重要な場所におさめられており、岡寺としても大切に扱われていたことがわかります。保存状態も良く、板図としても年代があきらかな新資料です。本堂の建築経緯を示す資料として大変貴重であり、棟札とともに永く保存されることが期待されます。（都城発掘調査部　大林 潤）



岡寺本堂東脇内陣建地割図（赤外線オルソ画像）

高松塚古墳 解体実験用石室の公開

飛鳥資料館の庭園に、高松塚古墳の石室の実物大複製が登場しました。この石室は、平成18年から翌年に実施された高松塚古墳の石室解体作業のために製作されたものです。石材をつり上げる装置の開発や、作業のシミュレーションのために、京都府加茂町の実験場で使用された解体実験用の石室です。

実験用石室は実物と同じ16石で構成されています。石室内寸は実物にあわせていますが、外形は盗掘孔のある南面だけ見えていた状態で全体を推定して製作したため、寸法や形状が実際と異なる部分がありました。そこで、実物の情報をもとに梃子穴や相欠といった特徴や、予想外の形だった一番北の天井石を補足し、できるだけ実物に近い形状に整えました。実物の石材は二上山産の凝灰岩ですが、現在は入手困難なため、福島県産の凝灰岩（白河石）を使用しています。

実験用石室は石室解体事業が終了した後、飛鳥資料館で保管していました。その活用がながらく課題でしたが、石工の左野勝司氏の協力を得て、石材の加工と組み立てをおこない工事も完了し、公開することができました。

石室解体の現場では石室周辺に最低限の空間しかなかったので、石室の全貌を見通して眺めることはできませんでした。今回の展示によって、はじめて床石から天井石まで全体を見渡すことができるようになりました。

小さな古墳と言われることが多い高松塚古墳ですが、この石室で、実物大の迫力を体感してください。

（飛鳥資料館　石橋 茂登）

公開された解体実験用石室